

線 射 技

五月二十日
の本紙朝刊
に、A.M.D.A
が旧ユーゴの
ボスニアで医

療支援活動を開始すべく
第一陣の医療団五人が六
月五日に現地に出発する
旨の記事が掲載され、予
定通りボスニア入りし
た。

昨年十二月十四日の和
平調印の結果、ボスニア
の各地に難民となった
人々が掃蕩しはじめたお
り、戦場で破壊された医
療システムや医
療機関の再建の
ための援助が急
務となってい
た。



私達は対立するモスリ
ム系、セルビア系、クロ
アチア系の三勢力に均等
に支援を行う予定だ。支
援は被災した全ての人々
に対するものであり、特

定の勢力の支援にのみ活
動するのでは、政治的立
場を誤解され、その結
果、支援従事者の安全性
に支障が生じる可能性が
高い。

支援の公平さ

アフリカのルワンダで
も同様の経験をした。難

民となって流入した
部族の支援を行ったのだ
が、A.M.D.Aは同時に
ルワンダの首都キガリの
病院の再建をも支援し
た。

ルワンダ国内に残った
もう一方の部族も、荒廃
した医療の中に取り残さ
れていたのであった。援助
を行う際は、その援助が
新たな不平等を生み出さ
ないようにする配慮も必
要なのだ。

の政治情勢をもろに反映
して、シアヌーク派、ソ
ン・サン派、ボル・ポト
派といったグループ分け
の色彩が強かった。

そのうちの一つの団体
から親睦会への招待を得
て出席すると、あの人は
〇〇派の味方をしてい
る、と言われる。だか
ら、全てのお誘いに出席
するか、全てのお誘いを
欠席するか、どちらかに
するよりほかなかった。

支援活動に従事してい
ると、「平等」「不平
等」に敏感にならざるを
得ない。

民流出の主原因
は国を二分した
部族抗争にあっ
た。多くの団体
が隣国ザイル

インドシナ難民定住促
進センターに出入りして
いたころの事。当時のカ
ンボジアから日本への難
民団体には、当時の母国

(小林 米幸 II A.M.D
A・アジア医師連絡協議
会日本副代表)